3 月 27 日のメッセージ

聖書：マルコによる福音書　9：　2 – 10

「わたしの愛する子。これに聞け」

救いがいよいよ確かなものである。一方、その前には必ず苦難がある。どちらもが確実だとわかっている時、人間はどちらを選ぶのでしょう。もしかすると、目の前のことに心を奪われて、救いの道を選ばないかもしれません。いざという時には逃げ出すかもしれません。人間の弱さをわかっておられるイエスです。だからこそ、イエスは山に登られる時、弟子たちを連れて行かれたのでしょう。

高い山は神に最も近いところです。かつてモーセは、シナイ山で教えと戒めを記した石の版を授けられた時、一人で山に登るように命じられました(「主が、『わたしのもとに登りなさい。山に来て、そこにいなさい。……』とモーセに言われると、……モーセは、……言った。『……ここにとどまっていなさい。……』」出エジプト記 24:12-14)。モーセの他には誰も神に近づくことは許されませんでした。そして、主がモーセと共におられる様子を、他の人は遠くから見るだけでした(「……主の栄光はイスラエルの人々の目には、山の頂で燃える火のように見えた。」出エジプト記 24:16-17)。

預言者エリヤが地上から取り去られた時(=天の神の下に上った時)、預言者エリシャだけが共にいました(「彼らが話しながら歩き続けていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。」列王記下 2:11)。エリシャは神の業を、神の栄光を目撃したので神の栄光を確信していましたが、エリシャ以外の誰もが、エリヤが天に上ったことをにわかには信じなかったと言います(「彼らはエリシャに言った。『……彼らにあなたの主人を捜しに行かせてください。主の霊は彼を運び去り、どこかの山か谷に投げ落としたかもしれません。』」列王記下 2:16)。

主の栄光を目撃すること、それが救いの確信につながっていることは間違いありません。

不安の中にあるペトロ、ヤコブ、ヨハネが高い山で目撃したのは、イエスの姿が変わるという出来事でした(「……イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、……」マルコによる福音書 9:2-3)。モーセとエリヤが共に現れてイエスと語り合っているのを見て、ペトロは救いを改めて確信したことでしょう。もしかすると、歴史上の誰もが見たことのない主の栄光を見たから、特別な思いを持ったかもしれません。自分は「選ばれた者」になったのだ、と。

しかし、ここで大切なのは、選ばれた者だけが救いを目撃することができる、確信することができるという選民思想が強調されているのではない、ということです。「……雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』」(マルコによる福音書 9:7)。これまで、選ばれた者にしか聞こえていなかった神の言葉をペトロは、ヤコブは、ヨハネは聞きました。しかもそれは、イエスこそが神の救い主であることを保証し、イエスの言葉にこそ救いがあることを裏打ちするものでした。生きた神の言葉としてのイエスが目の前におられることに気づかせてくれる言葉でした。しかも、全ての者が直接にその言葉を聞くことができるのです。

この言葉が弟子たちの心に光を点しました(「……わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。」コリントの信徒への手紙二 4:6)。たとえ苦難があったとしても、神を見上げ、救いを待つ力となりました(「主を待ち望め／雄々しくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め。」詩編 27:14)。

今、同じ言葉が私たちにも語りかけられています。改めて生きたイエスの言葉に聞き続けましょう。そして、常に神を尋ね求めましょう(「心よ、主はお前に言われる／『わたしの顔を尋ね求めよ』と。主よ、わたしは御顔を尋ね求めます。」詩編 27:8)。